



【2013-04-27】

裏土御門 陰（おん）の長者
幕末動乱編

連載第6回
第六章「箱根越え」

虹岡 思惟造

第6章 箱根越え

大久保から報告を受けた井伊大老であったが、その剛腹な性格もあって、ことさら大仰な警護はかえって幕府の威信を損なうとして、現在の体制で充分であるとした。その代わりに、伊賀組の増強と幕府隠密の諜報活動を強化する方針を決定する。このような直弼の剛腹な性格と警護に対する認識の低さが、この後、仇となって桜田門外で水戸浪士の襲撃を受け、自らの死を招くことになるのだが、この当時はむろん誰も知る由もないことであった。

そのような次第で、勅使一行は、従来通りの行列を組み、東下を続けた。そして大井川の渡しも何事もなく通過して、いよいよ最大の難所である箱根路に差し掛った。箱根八里といわれる箱根越えは、参勤交代の大名もよく通行する街道であったので、道の中央部分に石畳が敷かれており、雨でもぬかるむことのないよう整備されていた。しかし道幅は狭く、急こう配の連続であり、東海道随一の難所であることには変わりなかった。



三島口の麓から箱根峠に向かう道の両脇は杉並木になっている。夏場は日差しを遮る効果があって、旅人はその恩恵を受けることができたが、今は晩秋であり、鬱蒼と聳える杉木立は箱根路を暗くするばかりであった。そんな狭くて暗い坂道を二百名もの大人数が進むので、行列は長く伸びて、それぞれは登るのが精いっぱい、威儀を正すような余裕はなかった。勅使や大名など高貴な身分の者は、駕籠に乗って、箱根越えをする習わしになっていたが、勾配のきつい坂道を駕籠に乗り続けるのは、非常に辛いものがある。暫くの間は、公家らしく駕籠に納まっていた勅使の二人であったが、平坦な所は歩いたり、急坂は馬に乗り換えたりして進むようになった。杉並木の暗い小径が延々と続くが、それでも途中見晴らしの良い個所もあって、紅葉で覆われた山肌を一望することが出来た。そのような小高いところや道中の要所には、周辺一帯の警護の任にあたる小田原藩の藩兵が警護に当たっている。又、伊賀組の配下の者も箱根山中に分け入り狙撃する者がいないか警護の目を光らせていた。

勅使一行はようやくにして箱根峠を越えて箱根宿に到着した。箱根宿は三島宿と小田原宿の間点の箱根山中の芦ノ湖畔にあり、隣り合わせに箱根の関所が設けられていた。宿場規模はそれほど大きくなかったものの、本陣は六軒を数えるなど宿泊施設は充実していた。峠越えの疲れた身体を休めるため、この宿場に泊まる者が多かったことや、箱根の関所が開くのを待つために一夜を明かす旅人が多かったのである。

この地における勅使饗応は小田原藩が幕命により務めていた。宿場の入り口には小田原藩家老以下の重役が待ち受け、一行を関所の先にある勅使接待所に丁重に案内する。この接待所は関所

付属の常設施設であり、年に数回、京都と江戸の間を行き来する勅使の慰労と饗応のために幕府が設けていたものである。その場所は、芦ノ湖畔の小高いところにあり、富士山と湖が一望できる絶景の地であった。この地区は堂ガ島という名が示す通り、昔は芦ノ湖に浮かぶ小島であったが、何時の頃からか、その一部が陸続きとなり、半島のような形状を成している。その為、景勝の地であると共に、警護に適した地でもあった。



その夜、半島の根元にあたる接待所の入り口周辺には、篝火がいくつも焚かれ、武装した小田原藩兵が厳重に警護していた。しかし夜が更けるに従い、気温がどんどん下がって行き、警護の兵士達は、暖を求めて篝火の周囲に集まるようになった。その分、警戒の網の目が粗くなるとして、警護責任者の大番頭が、持ち場に戻るように叱咤して廻る。渋々、元の持ち場に戻った警護の兵達であったが、風に乗って甘酸っぱい匂いが漂ってくると、何故か睡魔が襲いかかり、遂に抗しきれずにその場にうずくまり寝入ってしまうのであった。

大番頭も寝入ってしまったのか、怒鳴りつける声もなくなり、辺りは篝火の爆ぜる音だけがするばかりであった。と、その時、闇から黒装束の一団が湧きだした。その数二十名ほどであろうか、その内の一人は他に抜きん出て大柄で身の丈は優に六尺（182センチ）を超えるであろう。この者だけは山伏姿であり、面を露わにしている。手には金剛杖を持ち、周辺を油断なく見廻しながら仲間と共に接待所の入り口に近づいて来たが、そこで、はたと足を止めた。入り口の奥の闇の中から、別の黒装束の一団が湧き出したからである。この者達は、夜を徹して警護の任にあたっていた伊賀組の面々であり、その先頭には柘植の姿があった。

「一大事にござります！」

勅使接待所の一室で寝ていた溥明は、その声に目を覚ました。声の主は神埼吉蔵らしい。吉蔵は勅使の身辺警護のために、今夜は宿直(とのい)をしていた筈である。

「何事ぞ」

襖を開けて部屋に入ってきた大きな影はやはり吉蔵であった。

「何者かの襲撃を受けたとのこと、伊賀組柘植殿よりの急な知らせでおます」

「なに！敵の人数はいかほどか？撃退はしたのか？」

「襲いかかりたる者共は二十名程なれど、なんでも小田原藩の警護衆は寝入ってしめて、伊賀組のみで闘いを続けとるようどす」

「すると、今もなお防戦中ということか」

「いかにも左様で、敵の頭と思しき者の攻撃が凄まじく、味方は押され気味のよし」

吉蔵の言葉に溥明は立ちあがり、素早く袴を身につけ、床の間の脇差を腰に手挟み、大刀を左

手で掴んだ。

「吉蔵、加勢に行くぞ。そちも付いてまいれ」

「承って候」

待っていましたというように、吉蔵は応えて、溥明の後に従った。

～以下次号に続く～